

土木學會選奨土木遺産

あしかがしきんだいすいどうしせつぐん

足利市近代水道施設群

平成27年度認定

○所在地：栃木県足利市

○完成年：1930（昭和5）年

○名称・構造形式等：

- ①緑町配水場 配水池：RC造、水位計室および保守点検入口棟付（1955年改築）、幅約60m、奥行約27m、面積1,607㎡、3池に区切られる
- ②緑町配水場 水道山記念館（旧管理事務所）：木造平屋建、瓦葺（1934年改築）、建築面積200㎡
- ③緑町配水場 接合井：RC造（ろく屋根）、塩素滅菌室付、面積43㎡
- ④緑町配水場 水道計量室：RC造平屋建、桁行2.5m、梁間1.5m、面積4.0㎡
- ⑤今福浄水場 ポンプ室：RC造地上1階地下1階建（ろく屋根）、面積208㎡

○管理者：足利市

位置図



足利市近代水道施設群は、中島鋭治門下の米元晋一の指導により、中島貞一郎（八王子市水道部工務課長兼主任技師。後に足利市水道技手として招聘）・中谷繁治（八王子市水道部主任技師。後に足利市水道技手として招聘）が設計した。

なお、中島鋭治は、わが国の衛生工学の基を築いたお雇い外国人ウィリアム・K・バルトンの後を受け、東京帝国大学工科大学教授として多くの教育者・技術者を育てるとともに、東京市水道技師長・内務技師等を歴任する等、“わが国の近代上下水道の開祖”と呼ばれる人物である。米元晋一は、この中島鋭治の薫陶を受けた技術者で“中島門下の三羽鳥”と評され、釧路・横浜・和歌山・浜松・広島・岩国など多くの都市の上下水道顧問として指導にあたり、1957年には水道界初となる保険文化賞を授与されている。

このように、足利市近代水道施設群は、当時においてわが国を代表する近代水道の設計者の指導により竣工した施設であり、また“中島門下の三羽鳥”の一人西大條覚（にしおおえだ・さとる）も、後述するように設計の前段階において関わっている。

足利市近代水道施設群は、1917（大正6）年に飲料水の不良を訴える一部地区の住民からの要望によりその検討が始まり、1921（大正10）年1月の市制施行において上下水道事業が市の重要事業として位置付けられた。1922（大正11）年4月に内務省の西大條覚技師の意見聴取、7月に東京イリス商会のザラー技師が招聘され水源地の実地調査や水量・水質調査等が行われ、その後、1928（昭和3）年4月に足利市上水道の施行実施が決議された。翌1929（昭和4）年5月に着工され、1930（昭和5）年12月に計画給水人口55,000人として竣工、1931（昭和6）年4月に給水が開始された。

今回、選奨土木遺産に認定された施設は、すべて1930（昭和5）年に竣工し現役で稼働している施設である。また、すべて国登録有形文化財（建造物）として評価されており（2006年3月23日）、保存状態も極めて良好である。19世紀末から20世紀初頭にかけて流行した直線を主体に幾何学的構成のデザインを特徴とするゼツェッション風の装飾性豊かな施設群で、近代の息吹が感受されるとともに、足利市の近代化の様相を今に伝える歴史文化遺産でもある。文化財の公開として市による一般への公開も恒例化されており、今回の選奨を機に、近代化のモニュメントとしての土木遺産として、さらなる啓発に結びつくものと考えている。

なお、構成施設の一つ緑町配水場水道山記念館（旧管理事務所）は、昭和天皇が1934（昭9）年の陸軍特別大演習に際し行幸された折に御座所として改築され、現在も椅子等の調度品が当時のまま展示されている。



①配水池



②水道山記念館



④水道計量室



昭和天皇来足(昭和9年)



①配水池内部



③接合井



⑤ポンプ室



配水場建設工事(昭和4年)